

研修報告書「写真コレクションによる展覧会づくり」

(20 世紀の写真芸術 学生がつくる大阪新美術館建設準備室・enoco のコレクション展)

瀬崎彩乃

インターンシップ参加のきっかけ

私は大学で学芸員の資格課程を履修している。それは自身が今まで積み重ねてきた美術に関する知識をそのまま活かせる仕事は何かと考えたときに、真っ先に思い浮かぶのが博物館、美術館で働く学芸員だったからだ。将来、とにかくアートに関わる仕事がしたいと考えていた私は、少しでも自身の進みたい方向へ歩める可能性を広げるために同時に教職課程も履修している。そんな私なりの頑張りを知ってくださった大学の職員が学内博物館の学芸員を紹介してくださった。この度のインターンシップの募集を教えてくださいましたのはその方であった。またとない機会に、私は直ぐに応募した。

学芸員の募集は少ない。私自身そのことはよく理解している。それ故に強い憧れを抱いていた私にとって、学芸員の仕事を体験できるこの度のインターンシップはまたとない機会であった。

展覧会をつくるということ―展示テーマを決めるまで

私は岩宮武二氏の作品を扱う 5 章を担当した。インターンシップ参加人数の関係で、一人でこの章を担当することになった私は、研修が始まった当初、600 を超える作品数をどのような観点で絞り込むかを考えることにした。5 章は展示グループの中で唯一扱う作家が一人であったため、私は岩宮氏の画集や著作物、彼を取り上げている書物から、彼がどのようにして写真と向き合っていたのかを調べることにした。私自身の専門は絵画であるため、写真に対する知識が特にあるわけではない。しかし、岩宮氏の作品がストレートフォト(フィルムカメラで撮影された加工を一切しない写真)であったため、写真の技法などに疎い私でも理解がしやすかったと思う。そうするとますます彼が“何を、どのようにして撮ったのか” が気になり、岩宮氏の感性、制作姿勢に迫ることを本展示のテーマにすることとした。彼の場合、読売新聞での連載の中で自身の作品について語っている文章が多く残っており、作品のみならず彼自身の言葉が作品理解の助けとなった。同時に俳句や書道、絵画といったあらゆる分野の作品を残した彼の「芸術」そのものへの向き合い方を知り、“写真だけでは岩宮武二を語れない” と感じたため、展示にも俳句を盛り込むことにした。

―展示作品を絞る

膨大な作品数の中から展示作品を選び出す際にも彼の残した作品集が役立った。あらゆるモチーフを被写体に選んでいる岩宮氏はテーマごとに分けて発表している。そのテーマに沿って作品を選ぶことが、彼の仕事を網羅する展示になり得ると考えたのだ。ま

た、岩宮氏は私が通う大阪芸術大学で昭和41年から亡くなられるまで、およそ25年間教鞭をとられており、生前交流のあった先生方から直接お話を聞くことができたのは、より明確に彼の制作姿勢をイメージする助けになった。また同時に、大阪芸術大学が所蔵する岩宮氏の作品と、大阪府・市のものとの系統に違いがあることに気が付き、大阪府・市のコレクションだからできる展示を目指して選定することとした。こうして展示作品が決まったのは研修が始まってから約二か月後だった。その中からチラシなどに使われる、メインビジュアルとなる作品1点を選び出すのだが、私が希望した作品は写真データを新たに撮らなければならない、そのために経費がかかってしまうとのことで、既にあるデータの中から最も本展示テーマに沿ったものを選び出した。美術館運営という点で決まった予算内で最高の展覧会をつくりだす難しさを感じた場面であった。

チラシ内や展示室で最初に観者が観ることになる章解説の執筆が一番苦勞した部分であった。この文章は作品や作家について客観的事実に基づいた事柄を中心に構成しなければならないのだが、このころにはすっかり私独自の作家像が出来上がっており、それらを区別するのが非常に困難だった。実際私自身が執筆した初期の原稿では、伝え聞いた岩宮氏の人柄やモチーフに対する考えなどが盛り込まれており、伝記的な事実欠缺した抽象的なものであった。

一 展示の流れをつくる

そこから何を目玉(中心となる作品)とするのか、配置をどのようにすれば観者が観やすく、また展示の意図が伝わるのかを考えるのは少し骨が折れた。作品の並びは勿論のこと、キャプションの位置まで事前にシミュレーションしていたにもかかわらず、いざ展示作業をして見ると受ける印象が違ったりと、レイアウトの難しさを痛感した。作品同士の間隔をほんの少しいじるだけでも、作品そのものの印象を大きく変えてしまうのだ。観者は作品をひとつずつ観ていく。今観ている作品の鑑賞には必ず今まで観てきた作品の印象が関わってくる。隣り合う作品同士が語り合い、展示室全体で一つの流れができる。観やすい展示をつくることとは、その流れを心地の良いものに整えることなのだ。改めて全体で展示であり、個々の作品で展示が成り立っているのだと感じた。



▲展示作業を見守るインターン生

ワークショップ内容の立案

展示内容の企画ともう一つ、ワークショップも今回のインターンシップの一環として実施された。その内容は、インターン生がそれぞれ案を持ち寄り、プレゼンテーションした後、話し合いにより決められた。出てきた案は受動的学びと能動的学びとに大きく分けられるもので、例えば外部から専門家を招いての講演会形式のものであったり、「撮影する」ことを参加者とともに体験するものもあった。

私が出した案は、『インスタ映え』という言葉に表れているように、現代人に浸透している写真の役割と、展示されている美術作品としての写真との違いに注目。実際の美術作品を拡大印刷し、それをフォトスポットとして、来館者が自由に撮影できる体験型ワークショップを提案した。近年、撮影可能な美術館も出てきており、SNS への投稿を推進すれば展覧会の広報の役割も可能であるとの狙いもあった。しかし、実際の美術作品を扱うには著作権の問題をクリアしなければならない。展示された作品のうち何点かはそういった扱いができないものもあった。また、フォトスポットを設置してしまえば、インターン生の関わりが希薄であることが、今回のワークショップの趣旨に合わなかったように感じる。時代にあった、現代人にウケるワークショップを実施することで、普段美術鑑賞に関心のない若者の招致を目指したのだが、展示内容は写真史に言及したものであり、ワークショップとの関連性も乏しいものであったと、今は分析している。加えて、私のプレゼンテーションは内容を記したレジュメを配り、口頭で説明したものであったが、完成予想図など視覚的にわかる図を用いればもっと伝わりやすかったのではないかと反省点が多数あった。趣旨に沿った企画を練ること。それを分かりやすく他人に伝えること。そして複数の案の中から最も適した一つを選び出すこと。それぞれがもっと上手くできるようになりたいと思った。

ワークショップの運営

私たちが選び出した案は、小学生をターゲットとした「ピンホールカメラをつくる」ワークショップである。ピンホールカメラとは光を完全に遮断できる箱に小さな穴を開け、そこから入る光を感光紙にとりこむことで、像を映すことができるカメラのことである。インターン生のほとんどがこのカメラを作ったことがなく、事前に自分たちで作って見て仕組みを理解する必要があった。この案を出した写真を専門に学んでいる学生が交流のあった、過去にピンホールカメラのワークショップを開催した経験のある大阪芸術大学写真学科教授の吉川直哉先生から直接ノウハウを学んだ。その事前指導の中で子どもを相手にするからこそ起こり得るトラブルのお話も聞くことができた。



▲事前指導のようす

三日間実施するワークショップを初めは一日、3人の学生で担当することとしていたが、限られた時間内に事を進めるため、子どもたちの動きをコントロールする必要がある、それに思っていたよりも苦戦することに気づいた私たちは、二日目から5人体制にすることとした。私が担当したのは最終日であり、その日助っ人に来た学生2人は既にワークショップを経験しており、とても頼りになった。しかし、あくまで助っ人であり、担当である私たちが主体となって動かなければと、考えていた。私はその日の全体の進行役であったこともあり、子どもたちの前で話すことが多かったのだが、話すうちに伝え忘れてしまったり、必要以上に話が長くなってしまったりと苦戦した。初めは自身の緊張からであったが、後半になり子どもたちが慣れてくると今度はまとまりがなくなり、これもまた指示が正しく伝わらない要因となった。しかし子どもたちが夢中でカメラづくりをしたり、真剣に撮影場所を選ぶ姿から楽しんでもらえていることを肌で感じる事ができ、次第に肩の力も抜けてきた。一番心配していた暗室での作業も、ケガやトラブルもなくできたことがよかった。



▲暗室のようす(事前指導時)

スタッフを増やしていたことが幸いし、一度で指示が伝わらなければ、その都度子どもたちのそばで指導することにした。現場でそれぞれ手分けして子どもたちの対応をすることができたので、ワークショップを時間内に終えることができた。三時間半という長い時間を子どもたちも集中できたのは、暗室や撮影のために外にでるなど、場所の移動が良い気分転換になったのかもしれないと感じた。出来上がった子どもたちの写真を見るとそれぞれの興味関心、こだわりが感ぜられ、私自身とても達成感を味わえた。子どもたちの作品は展覧会期中会場の一角に飾られた。



▲子どもたちの写真作品と手作りカメラの写真

このワークショップの意義は、子どもたちが手づくりしたカメラで撮影することで写真の仕組みを自然と学べる事。何度か撮影を繰り返すうちに、出来上がりを想像

し、創意工夫をしようとする事などが挙げられると思うが、私が最も重要であったと考えるのは、自身の作品、成果をたくさんの人に見てもらい、認められる体験をする事である。この度のワークショップが子どもたちにとってひとつの成功体験となり、作ることの喜びを伝えられたのなら、それが一番の成功の証であると考えている。私自身、保護者の方への言葉遣いや子どもたち一人ひとりへの丁寧な対応など、課題もみえ、とても有意義な時間であったと感じている。

さいごに

この度のインターンシップを通して学芸員の仕事の一片を経験、知ることができた。展覧会という形にするまでに、展示の目的や趣旨をどのようなものするのか。それを全体で理解しておかなければ、展示室ごとにバラバラでちぐはぐな印象を観覧者に与えてしまう。私は一人で章を担当し、展示室も一つの独立した空間であったため、そこまで強く他章とのかかわりを考えずに済んだが、二人で一つの展示空間をつくりあげる際、展示イメージの違いを摺合せることに苦戦していた学生もいた。勿論当初は一人であることが不安であったが、学芸員の方のサポートも得られ、自身のタイミングで物事を決めていけるため、良かったと思う場面もあった。また、企画から展示作業を通して、展示テーマが明確でなければ、展示作業の際に業者にどのようにしたいか伝えられない。そのあやふやさはそのまま、観覧者の鑑賞の邪魔になってしまう。美術館とは教育機関の一つであり、解説一つ間違いは許されないという緊張感を肌で感じた。

また、ワークショップのプレゼンテーションなどでは企画力、それを他者へ伝えるプレゼンテーション力など、社会で必須であろう事柄を経験でき、自身の課題をより明確に知ることができた。私も来年度からは社会人として働くことになる。人類で共有すべき大切な美術作品を扱うという学芸員の仕事とそれに求められる資質を知ることができたこの度のインターンシップを通して、アートに携わる仕事がしたいと考えている自身がどのように働きたいのか。いかにしてアートと関わりをもっていくのか。これからの将来を決めるにあたり、重要な指針を得られたように感じる。そして同様に美術に関心があり、学ぶ学生の仲間に出会え、交流を持てたことは自身の刺激となり、今後の残り少ない学生生活で何をすべきか考えさせられる機会が増えた。研修全体を通して自身のさらなる成長のために意欲的に取り組む意思が育ったと思う。